



# 貝原守一医学振興財団会報

第9号

— 創立十周年記念号 —



foundation juridical person MEDICAL SCIENCE KAIBARA MORIKAZU PROMOTION FOUNDATION

貝原守一医学振興財団  
会報 第9号・創立十周年記念号

目 次

- ・ 巻 頭 言..... p1  
橋場 邦武 (財団理事 長崎大学名誉教授)
- ・ 財団の創立十周年を迎えて ..... p2  
佐伯 清美 (理事長)
- ・ 第9回研究助成金贈呈式のこと ..... p3  
佐伯 仁子 (専務理事)
- ・ 平成12年度貝原守一医学振興財団研究助成選考過程について.. p4  
橋場 邦武 (財団理事 長崎大学名誉教授)
- ・ 第9回研究助成金受賞者の研究内容 ..... p6
- ・ 平成12年度青藍会貝原守一賞受賞者 ..... p10
- ・ 平成12年度宮崎一郎奨励賞 (第6回) 受賞者..... p11
- ・ 財団の主な事業報告 (平成12年4月~平成13年3月) ..... p12
- ・ 貝原守一医学振興財団の歩み ..... p14
- ・ 研究助成金受賞者一覧 ..... p16  
平成4年 第1回~平成12年 第9回
- ・ 財団より研究助成を受け公表された論文 (1995-2001) ..... p19
- ・ 貝原守一の遺稿より (その9) ..... p22



「貝原守一先生の原点」

財団理事・長崎大学名誉教授  
橋場 邦武

貝原守一医学振興財団が創立十周年を迎えた。この間に、本財団の最も重要な事業である研究助成金が合計 60 名の優れた研究者に贈与され、本財団の当初の目的が着実な歩を続けてきたことは、本財団の設立および運営に並々ならぬ御努力をされてきた方々の高い理念と緻密な実行力によるもので、お慶びを申し上げるとともに心からの敬意を表するものである。

最近 50 年間の医学の進歩はそれより以前の約 200 年間の進歩を凌駕するものであったといわれるように、今後の 20~30 年は今日までの 2000 年をさらにまた遙かに凌駕するであろうと思われる。そして、ゲノム確立における企業研究所と公的研究所の、人類の知的所有権を賭けた競争の凄まじさをみると、今後の研究の或分野は、従来の優れた個人研究者による学問とは些か趣を異にして、人海戦術的な集団的作業の様相に変貌していくのではないかと、いささか複雑な気持ちを覚えることもある。しかし、ゲノムの世界にしても、その応用までを含めた発展を考えるならば、真に求められるものはやはり研究者の個性と叡知ではなからうか。

貝原守一先生の遺稿集「医学と科学精神」を繙くと感銘を受ける点が多々あるが、先生の年譜の中には、「昭和 6 年 20 歳、九州帝国大学医学部に入学。入学祝いにタイプライターと顕微鏡を買ってもらおう。」という一項が記されている。この頃にはこのような事があったものなのか。先生の御希望であったのか、御父君のお考えであったのか、武家のような御家風であったのか、なにも記されていないが、これを読んだ時、昭和 6 年という時代に、入学祝いにタイプライターと顕微鏡をというのは、私にはまことに印象深い驚きであり、限りない想像へと駆り立てられた。20 歳の青年のこのように新鮮で純粋な学問への決意と渴望に、先生の原点を垣間見る思いがするのである。

全世界が歴史的な政治・経済の大きな転換期の諸問題を負いながら新しい 21 世紀に入ることになり、課題に直面することも考えられるが、貝原先生の研究者としての原点が、今後も本財団の事業の発展を支える理念であることをあらためて感じる次第である。

## 財団の創立十周年を迎えて

理事長 佐伯 清美

平成3年3月に本財団が創立され、本年で十年が過ぎた。つつがなく十周年を迎え得たことを関係者の皆様とともに歡びたい。

本財団は、「医学に関する研究に対して、資金面で援助を行い、医学の発展、医療の向上を図り人類の幸福に寄与する」という尊い目的を以って誕生したのである。

創立者 貝原芳子女史が、大平洋戦争で戦死された夫、貝原守一先生を記念し、私財を投じて設立されたものである。

創立十周年に際して、記念事業も考えたのであるが、資金面での都合がつかず残念ながら断念せざるを得なかった。設立当時数年、運営資金は十分にあり、事業も順調に行えたのであるが、間もなく訪れた日本経済の崩壊により、財団の事業資金になっている銀行利子に頼る金額が、極端な低利率、低額によって年々減額し、事業の遂行が困難になってしまったのである。

本財団の最重要事業である研究助成金授与も九年間滞りなく続けてきたものが、本年は遂に中止せざるを得なくなった。誠に残念であるが、一日も早い日本経済の正常化を希う次第である。

因みに、この10年間の研究論文助成に対しての応募者は237名で、助成金贈呈者は57名である。助成金授与者で研究が終わり、論文を医学雑誌に発表され、別刷を送っていただいたものは21件であった。この場を借りて、選考委員として年々の論文選考に携り、素晴らしい選考をしていただいた諸先生に感謝の意を捧げたい。

その他、財団の事業として、貝原守一先生が助教授として在籍しておられた、九州大学医学部細菌学教室同門会（青藍会）に、貝原守一賞（平成4年より）を、本財団の初代理事として御指導頂いた宮崎一郎先生を記念し、同大学医学部寄生虫学教室同門会に、宮崎一郎奨励賞を設置（平成6年より）し、年一回夫々の同門出身の優秀な研究論文発表者に賞を授与させていただいている。細やかな事業であるが、本財団にとっては意義のある仕事である、今後もずっと継続してゆきたい。

また、この十年間には、優秀な医学書の著者に対しての優秀医学書出版賞を二名の著書に授与させていただいた。

以上が、この十年間に財団が為し得た細やかな事業の概要である。

今日、めでたく十周年を迎え得たのは、財団の設立より運用に当たっていただいた県庁の関係係官の温かい御指導、関係各大学の御理解と御協力のお陰であり、慈に心より御礼を申し上げ、今後とも一層の温かい御指導御助力を願い申し上げたい。

また、今日まで、円滑に財団の管理運営が出来たのは、一重に財団の理事を始め、役員の方々の献身的なご協力のお陰であり、心より御礼を申し上げたい。

「創生は易く、守成は難し」と言われているが、本財団の創生は決して容易ではなかった。創立時御苦勞をおかけし、力を尽していただいた方々に改めて感謝申し上げる次第である。

今後、日本の経済がどのようになってゆくのか、また、大学の研究費の在りようがどのようになってゆくのか、未だ渾沌として不明であるが、我々は財団設立の趣旨「医学の研究に寄与し、医学、医療の発展を通して、人類の福祉に貢献する」という貴い使命達成のため、財団を守り事業を継続、発展させてゆく事を誓い、設立十周年にあたっての感慨と致したい。



## 第9回 研究助成金贈呈式のこと

専務理事 佐伯 仁子

平成12年度、第9回研究助成金贈呈式は、11月25日(土)午後4時半より、昨年と同じ、福岡市中央区天神のホテルガーデンパレスでおこなわれました。

式は、贈呈者4名を始め、来賓として選考委員をお勤め下さいました九大名誉教授森良一先生と財団役員9名、計14名の参加でした。

例年の通り、式進行は岩崎進氏(前財団職員)の司会で行われました。

先ず、理事長より挨拶があり、研究助成金贈呈者へのお祝いの言葉のあと、現在の厳しい日本の経済情勢の中で、とどろりなく助成金の贈呈が行える事は大きな喜びであり、関係各位の御尽力に対して心よりのお礼を申し上げます。本財団の運営はすべて預金利子に頼っているのですが、銀行の金利がほとんど零に等しい時に、こうして贈呈式が行えることは、一重に財務担当理事のお陰であります。

本年度の応募論文は21編で、この中4編がとくに立派な論文として選ばれたわけですが、今後贈呈金が役立って、4名の方々の研究が立派な成果を挙げることを期待しますと述べられました。挨拶のあと、理事長より賞状と助成金が各々研究者に贈呈されました。毎年の事ではありますが、財団の貴い重要な事業の行われる時で、感動と緊張の時間です。

贈呈が終わり、論文選考委員を代表して、橋場邦武先生(長崎大学名誉教授)より、選考について詳細な報告がなされました。論文の選考が、提出論文の研究目的、方法、将来性、有用性等の上に、過去の業績等も勘案して検討され、委員3先生の意見の一致をみた上で決定された事が報告されました。

また、来賓の森良一先生より次のような挨拶を頂きました。「受賞者の皆さんが、教室に帰られたら、先ず教授に受賞のことを報告して下さい。また、本財団設立の対象者であります貝原守一先生は大へん優秀な医学者でありました。先生が生前に発表されたウイルス学論文は、50数年前のものでありますが、内容として今でも正しい見解であり、優れた学者であったことが理解されます。皆さんも努力して貝原先生のように優れた学者になって欲しい」とお述べになりました。

式は約1時間で終わりましたが、この1時間の間は、本財団一年間の事業の総結集の時で、大きな感激、喜び、感謝そして希望で胸が一杯になるのでございます。若い4人の受賞者の研究成果を祈念いたしました。

式が終了し、一同で記念写真を撮り祝宴に入りました。

祝宴では、結城操理事が祝辞をお述べになり、4名の受賞者より、謝辞のあと、受賞対象になった研究論文の内容、意義の説明が行われました。

祝宴は贈呈者を中心に和気藹々と約1時間にわたって行われ、今年も無事に贈呈式を終えて感謝した次第でございます。

## 平成 12 年度 貝原守一医学振興財団研究助成選考過程について

選考委員・長崎大学名誉教授  
橋場 邦武

平成 12 年度の貝原守一医学振興財団研究助成に対しては、計 21 件の応募があり、杉山浩一郎（九州大学九州大学名誉教授）、森 良一（九州大学九州大学名誉教授）、橋場邦武（長崎大学名誉教授）、の 3 名の選考委員によって選考が行われた。最終選考委員会には、佐伯清美財団理事長も同席された。

今回は、公募による本財団の研究助成の第 9 回目にあたる。本邦の最近の経済・金利政策の現状のために、研究助成事業は大きな影響を受けており、今年度は受賞者を 4 名に限定して研究助成を行うこととなった。このような状況にもかかわらず、本年度も多数の優秀な研究課題の応募があり、将来性豊かな若い研究者への研究助成が行われたことは、本財団の最も重要な事業への評価の定着を示すものとして喜ばしいことである。

今回は、福岡県内の大学医学部および医科大学の計 4 校と、歯科大学 1 校、および公立病院などからの応募があった。

最近の大学機構改革の過渡的状況に伴い、講座あるいは教室名の表現からはその内容がやや把握しにくい場合もあるが、従来の表現でいうと、生化学、病理学、ウイルス学、分子生命科学、衛生学、内科、外科、脳神経外科、整形外科、泌尿器科、眼科、臨床歯科、輸血部、臨床検査部などの分野から 21 件の応募があった。最近の傾向として、生化学的、分子生物学的、免疫学的、遺伝子学的方法、あるいはその他の新しい方法による研究課題が多くなっているため、基礎と臨床の研究領域の境界を分けることは意義が少なくなりつつあるが、今回の応募課題も大きく分類すると、腫瘍、老化、変性、感染、免疫、動脈硬化などの発生や生態に関するものが多かった。また、端的に新しい治療方法の開発を主たる目的とする数件の研究課題もあった。

選考方法としては、第一段階として、3 名の選考委員がそれぞれ独自に、応募者の研究課題、研究目的、研究方法、添付別冊などの応募書類を検討し、また、これまでの研究歴、研究実績、発表論文の数とその内容、論文掲載雑誌の国際的評価などを総合して、応募研究の独創性、将来性、実現性などについての評価を行った。

第二段階として、選考委員会を平成 12 年 10 月 21 日に開催した。3 委員が各自の評価結果を持ち寄り、それを公表し合った上で、一課題ごとに意見を交換した。3 名の委員の評価がすべて一致をみるとは限らない点もあったので、約 2 時間を費やして検討を行い、委員会としての最終的な評価を決定した。優秀な応募課題が多かったので、その中から比較的少数の課題を選出して順位付けすることには心情的に忍びない場合もあったが、各委員の予備的な評価は概ね一致しており、選考委員会はとしては、問題点を残すことなく、最終的な結論を得ることができた。

その結果、別掲の一覧表に示したように、昭和 12 年度の研究助成金受賞者として 4 名の研究者が決定した。いずれの研究課題も高く評価されると判断されるもので、また、これまでの研究実績から考えても、今後の研究発展の成果が多いに期待される研究者と評価した次第である。

なお、4 名の受賞者以外の応募者にも立派な研究者が多かったことを特に付記しておきたいと思う。また、選考に当たっては、研究分野、研究方法などについての考慮



は全くなされていないので、今後に応募を希望される方々、あるいはそれを推薦して下さる方々にも、この点についての十分な御理解を頂きたく、今後も引き続き優れた応募のあることを願う次第である。

なお、平成9年の本財団会報に選考過程の報告を執筆した際に、受賞者が助成に関連した論文を発表された場合には、本財団の研究助成を受けられたことを論文後記に明記して、その別冊を財団宛に御送付下さるようお願いしておいたが、1995年から1997年にかけて発表された12編の別冊目録が平成10年度の会報に掲載できたことは、財団関係者の一人として非常に喜ばしいことと思う。今回の受賞者にも、重ねてこのことをお願いしたい。これは本財団の研究助成事業の記録として、非常に大切なものであることを是非とも御理解を頂きたいと思う次第である。

本年度も立派な研究助成者の選考を行うことができ、委員の一人としてまことに喜ばしく感じている。助成を受けられた研究者が優れた成果を挙げてそれを発表されることは、本財団の事業の客観的評価と今後のさらなる発展のための最も大きな原動力である。各受賞者の一層の御活躍を期待し、選考過程の御報告としたい。

療法の開発につながるものとする。

## —— 第9回 研究助成金受賞者の研究内容 ——

### 赤血球膜蛋白質 Band3 の構造解析

九州大学大学院医学研究院臨床分子医学

阿部 義人

band 3 蛋白質は赤血球外の塩素イオンと赤血球内の炭酸イオンの交換を行い、赤血球内の pH を調節することにより、赤血球の酸素運搬に必須な蛋白質である。これらの anion exchange の機能はこの band 3 蛋白質がイオン分子を認識することによるダイナミックな構造変化が関わっていると考えられている。その構造が解明されれば、anion exchange のメカニズムが明らかになるため、これまでになかった新しい分子認識機構が解明されると思われる。このことは、人の体内での生命現象を理解する上でも新たな知見を得ることができると考えている。一方、このような膜蛋白質の構造解析の方法は非常に限られているため、これまでその構造解析の例は数少ない。そのため、新たな遺伝子工学的な手法や原子レベルでの構造解析法（NMR および X 線結晶解析）を適用しその構造を解析する。



高度な免疫系である獲得/適応免疫をもつ哺乳動物でも、感染微生物を最初に認識、応答し、その後の生体防御反応の発動を制御するのは、単球・マクロファージなどの自然免疫担当細胞である。

自然免疫では、グラム陰性菌のリポ多糖 (LPS) などの、自己にはなく微生物表層に存在する特徴的な抗原に応答する。近年、こうした分子に対する細胞応答は、Toll-like receptor (TLR) という膜タンパク質を介して行われていることが明らかになった。一方、微生物成分による TLR 活性化の分子機構は未だほとんど不明である。本研究では、我々が構築した TLR 遺伝子導入細胞を用いた自然免疫活性化の再構成系を活用しつつ、微生物の認識、応答とその制御の分子機構を明らかにすることにより、多細胞生物の微生物認識機構、さらに生体防御機構の全体像を解明することを目的とする。また、本研究の推進は、現代社会でもなお、医学が克服すべき課題の一つである微生物感染による敗血症等の全身性炎症反応の予防と治療法の開発、あるいは自然免疫系の細胞応答反応を活用した種々の新しい免疫療法の開発につながるものと考えている。

## 腎疾患の進展における細胞接着シグナリングの病態生理学的意義

医学博士 田村 雅仁  
出版 田村

産業医科大学 第二内科  
田村 雅仁

ヒトの種々の糸球体疾患において、メサンギウム細胞の増殖と細胞外基質の異常産生は中心的な病理学的所見であり、様々なサイトカインを介した細胞外基質産生の亢進とその蓄積が重要な役割を果たしている。一方、細胞外基質の受容体であるインテグリンは、各種糸球体疾患で発現が亢進していることが知られている。インテグリンは受容体として細胞外基質と接着するのみならず、その細胞質側で多数のシグナル伝達分子や細胞骨格分子を含む接着斑と呼ばれる複合体を形成し、多彩なシグナル伝達の発動を行う。このように成長因子とインテグリンは共に細胞内シグナルの活性化を生じ重要な生理作用を持つことが知られているが、両者の相互作用はほとんど明らかにされていない。そこで我々は腎疾患の進展に与える成長因子による細胞内シグナリングと細胞接着シグナリングの相互作用を検討し、インテグリンシグナリングの病態生理学的役割の解明から糸球体硬化の進展機序の解明及び治療法の開発の一端を担えることを目的とし研究する。



## 膵臓外分泌腺細胞におけるリアノジン受容体の局在と生理機能

研究員 田島 悠貴 久留米大学分子生命科学研究所  
〒830-0192 久留米市大野木 1-3-1

膵臓外分泌腺細胞において細胞内ストアからの  $\text{Ca}^{2+}$  放出は様々な生理機能に重要な役割を担っている。動物細胞における  $\text{Ca}^{2+}$  放出チャネルには  $\text{IP}_3$  受容体とリアノジン受容体が存在し、外分泌腺細胞において  $\text{IP}_3$  受容体は消化酵素分泌や電解質輸送等に関連していることが知られているが、リアノジン受容体に関してはその存在も明確に示されておらず分子レベルでの報告はない。そこで本申請研究では、申請者がこれまで用いてきた最新の  $\text{Ca}^{2+}$  画像解析法に加えてノックアウトマウスをはじめとする分子生物学的手法も駆使して、膵臓外分泌腺細胞におけるリアノジン受容体の生理的役割を  $\text{Ca}^{2+}$  親和性等を定量的に解析することによって明らかにし、さらにはリアノジン受容体の細胞内情報伝達経路をも解明することを目的としている。本申請研究は分泌機能における細胞内  $\text{Ca}^{2+}$  ストアの役割を明確にするだけでなく、膵臓外分泌腺細胞の分泌異常による自己消化が原因とされる急性膵炎の発生機序の理解等の臨床的な見地からも非常に重要な研究であると考えられる。

青藍会（九州大学大学院医学研究院細菌学分野 同門会）貝原守一賞

については下記のごとく決定いたしました。

九州大学大学院医学研究院細菌学分野

教授 吉田 真一

---

### 平成12年度 青藍会 貝原守一賞

受賞者：

飯田 健一郎

九州大学大学院医学研究院細菌学分野

受賞論文：

**「 Type 1 fimbriation and its phase switching in diarrheagenic Escherichia coli strains.」**

発表誌：

**Clinical and Diagnostic Laboratory Immunology**

**8(3):489-495,2001**

この論文は下痢原性大腸菌の type1 線毛の発現の相変異をしらべ、腸管出血性大腸菌は遺伝子の一部の欠損のため type1 線毛を発現できないこと、また、下痢原性の強い大腸菌ほど type1 線毛の発現が陰性に傾いていることを報告した論文です。





財団の主な事業報告  
(平成12年4月～平成13年3月)

会 議

1) 評議会

開催年月日	開催場所	議 案
平成12年 6月24日(土)	福岡センタービル	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 平成12年度事業計画並びに収支予算案承認の件</li> <li>● その他</li> </ul>

2) 理事会

開催年月日	開催場所	議 案
平成12年 6月24日(土)	福岡センタービル	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 平成11年度事業報告の件</li> <li>● 平成11年度収支報告承認の件</li> <li>● 監査報告</li> <li>● 平成12年度事業計画案承認の件</li> <li>● 平成12年度収支予算案承認の件</li> <li>● その他の事項について</li> </ul>

調査研究活動

年 月 日	活動内容
平成12年 4月10日(月)	● 平成12年度財団会報(第8号)発行
6月27日(火)	● 平成12年度研究助成論文の募集を開始。 募集要項を各大学並びに関係医療機関に送付 募集機関7月1日から7月31日迄
6月28日(木)	● 平成11年度事業概況書作成
7月31日(月)	● 平成12年度研究助成論文募集締め切る 応募総数21件
8月9日(水)	● 研究助成論文応募者名簿並びに一覧表作成
10月21日(土)	● 研究助成論文選考委員会開催 4名の助成対象者決定 [於セントラルホテルフクオカ]
10月23日(月)	● 応募者並びに推薦者に対する採用通知及び不採用通知送付
11月25日(土)	● 研究助成金授与式施行 [会場 ホテル福岡ガーデンパレス]



助成事業

年 月 日	事業内容
平成 12 年 9 月 29 日 (金)	● 貝原守一賞 「青藍会」九州大学医学部細菌学教室に賞金 20 万円付託
9 月 29 日 (金)	● 宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室に賞金 10 万円を贈呈
11 月 25 日 (土)	● 平成 12 年度研究助成金授与式開催 [於 ホテル福岡ガーデンパレス] 九州大学医学部 2 件 久留米大学医学部 1 件 産業医科大学 1 件 計 4 件  1 件 50 万円 計 200 万円

## 貝原守一医学振興財団の歩み

平成3年 . . . . .

- 3月 創立 財団法人として福岡県知事認可  
初代理事長 貝原 芳子
- 7月 6日 創立記念式典・祝賀会  
貝原守一胸像除幕式  
九州大学医学部、久留米大学医学部  
福岡大学医学部、産業医科大学に対し  
財団設立記念研究助成金として各200万円の目録贈呈
- 10月24日 貝原守一賞 創立  
九州大学医学部細菌学教室 青藍会  
第一回受賞 諸岡達也（福岡大学筑紫病院小児科）  
以後 毎年一回 贈呈

平成4年 . . . . .

- 1月 優良医学図書 出版顕賞  
宮崎一郎 九州大学名誉教授  
図書名「Helminthics Zoonoses」
- 10月 3日 第1回（平成4年度）研究助成金の贈呈  
以後 平成12年まで毎年一回研究助成金贈

平成6年 . . . . .

- 2月26日 「貝原収蔵日記」刊行助成
- 7月 優良医学図書 出版顕賞  
榎屋富一 元九州大学教授  
図書名「The MECHANISM OF THE  
MICROFIRARIAL PERIODICITY」  
宮崎一郎奨励賞 創立  
九州大学医学部奇成虫学教室  
第一回受賞 橋口義久（高知医科大学助教授）  
以後 毎年一回 贈呈

平成7年 . . . . .

- 3月30日 貝原守一遺稿集「医学と科学精神」刊行助成



## 大学別応募者数

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
年度(平成)	4	5	6	7	8	9	10	11	12
応募件数	34	27	29	22	21	24	25	34	21
九大	10	10	8	7	11	12	11	20	9
久大	6	6	7	8	5	5	8	7	7
福大	0	1	1	2	3	1	4	2	1
産大	14	6	7	2	2	4	1	4	2
他	4	4	5	3	0	2	1	1	2
授与者	10	9	8	6	6	6	4	4	4
金額(万円)	850	900	800	300	300	300	200	200	200

## 年度別応募/助成状況

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
年度(平成)	4	5	6	7	8	9	10	11	12
応募件数	34	27	29	22	21	24	25	34	21
授与者数	10	9	8	6	6	6	4	4	4
合計助成金額(万円)	850	900	800	300	300	300	200	200	200

## 研究助成金受賞者一覧

年度	氏名/所属	研究テーマ
平成4年度	西村 淳二 九州大学医学部細菌学	血管平滑筋の緊張増殖調節機構の解明
	矢永 勝彦 九州大学医学部第二外科	肝移植後の動脈血栓症に関する研究
	掛地 吉弘 九州がんセンター	胃癌細胞の増殖活性とリンパ節転移
	松岡 雅人 産業医科大学産業生態科学	カルニチンによるアンモニア脳症の発症抑制
	加藤 貴彦 産業医科大学学生化学	発癌物質に対する遺伝的感受性の個体差
	中山 浩 久留米大学医学部第三内科	冠動脈拡張後の活性化単球の臨床的意義
	小田辺修一 久留米大学医学部	糖尿病の膵島細胞障害機序の研究
	飯田 弘 九州大学医学部解剖学	筋細胞の $Ca^{2+}$ 結合蛋白 (P57) の研究
	清原千香子 九州大学医学部公衆衛生学	癌と AHH 活性
	光富 徹哉 産業医科大学第二外科	原発性発癌によおける P53 遺伝子異常
平成5年度	中村 浩幸 九州大学医学部解剖学	酸化窒素 (Nitric Oxide, NO) 産成回路酵素群のラットおよびネコ中枢神経内在局様式ならびに中枢神経機能に対する NO 回路の生理的意義
	空閑 毅 九州大学医学部心血管研究施設	培養血管平滑筋細胞の各細胞周期における Ca チャネルの特性
	皆川 洋子 九州大学医学部ウイルス学	単純ヘルペスウイルスにより誘発される赤血球凝集反応のウイルス糖蛋白 C 欠損ウイルスを用いた解析
	森 正樹 九州大学医学部第二外科	消化器癌（とくに胃癌）の血行性転移における腫瘍血管の役割に対する研究
	阿部泰次郎 九州大学医学部第三内科	ヒトアンジオテンシン 1 型受容体遺伝子のクローニングと発現調節領域の解析
	星野友昭 久留米大学医学部第一内科	成人 Still 病患者の TCR $\alpha\gamma\delta$ 型 T 細胞抗原レセプター遺伝子の解析
	津田 徹 産業医科大学呼吸器科	前遺伝子産物 MYC の分解
	常岡 誠 久留米大学医学部分子生命科学	前癌遺伝子産物 c-MYC の分解
大崎 博美 産業医科大学第二内科	MM-LD2 (微量酸化低比重リポ蛋白) による冠動脈スパズム誘発に関する研究	



平成6年度	矢野 博久 久留米大学医学部第一病理学	肝胆道系癌におけるアポトーシスの研究
	原田 晴仁 久留米大学医学部第三内科	特発性心筋症の原因遺伝子の単離及び解析
	馬場 秀夫 国立病院九州がんセンター	胃癌における抗癌剤感受性規定因子および薬剤耐性の分子構造と耐性克服に関する研究
	倉岡 晃夫 九州大学医学部解剖学第二講座	肝臓ギャップ結合単位粒子レベルにおける構成蛋白コネキシン 32(CX32)およびコネキシン 26(CX 26)の混在様式に関する研究
	堀内 孝彦 九州大学医学部第一内科	腫瘍の悪性化に関与する遺伝子の同定-レックリングハウゼン病(NFI)をモデルとした試み
	村田 敏視 九州大学医学部眼科学	動物モデルの増殖糖尿病網膜症の薬剤療法
	広瀬 伸一 福岡大学医学部小児科	Glycosyl-phosphatidyl-inositol 結合型膜タンパク質の生合成と発作性夜間血色素尿症の発症機構
	田中 良哉 産業医科大学第一内科	骨代謝における接着分子サイトカインプロテオグリカンの役割に関する研究
平成7年度	大坪 素秋 久留米大学医学部分子生命科学	細胞周期のコントロールと癌化の分子機構
	白石 武史 福岡大学医学部第二外科	移植肺拒絶反応における Free Radical の役割
	紙仲 庄司 久留米大学医学部ウイルス学	紫外共鳴ラマン法によるウイルス粒子の溶液状態における構造研究
	後藤 純信 九州大学医学部脳神経研究施設	網膜神経細胞の興奮性に対するマグネシウムの役割
	田川 博章 九州大学医学部循環器内科	肥大心および不全心における収縮不全の発生機序に関する細胞・分子生物学的研究
	藤 也寸志 九州大学医学部腫瘍センター	新しい癌転移関連遺伝子 Mtal の解析
平成8年度	市来 俊弘 九州大学医学部循環器内科	AT2 の組織特異的発現と血圧調節機構
	坂本 泰二 九州大学医学部眼科	黄斑変性の治療開始
	甲斐 久 久留米大学医学部循環器	血管細胞増殖肥大における GPK-5 の意義
	樋田 一徳 九州大学医学部解剖学	中枢神経シナプス構成の形態学的研究
	君村 隆 九州大学医学部耳鼻咽喉科	MET 電流を修飾する細胞内環境変化
	神田 芳郎 九州大学医学部法医学	$\Gamma$ (1,2) フコシルトランスフェラーゼ遺伝子ファミリーの分子進化

平成9年度	青田 聖恵 久留米大学医学部ウイルス学	ジヌクレオソームを用いた遺伝子発現調節の研究
	室原 豊明 久留米大学医学部第三内科	高脂血症と虚血組織後血管新生に関する研究
	大池 正宏 九州大学医学部薬理学	脳微小血管内皮細胞の機能に関する情報伝達
	平野 勝也 九州大学医学部心血管研究施設	小血管内皮細胞の増殖抑制に関する情報伝達
	内海 健 九州大学医学部生化学	ABCトランスポータ遺伝子と疾患
	稲村 孝紀 九州大学医学部脳神経病研	新しい悪性腫瘍の化学療法の臨床応用
平成10年度	岡 直樹 久留米大学医学部第三内科	心血管系における Progesterone の効果と Caucola の関与
	浅野 嘉延 九州大学医学部第一内科	白血病細胞の G-CSF シグナル伝達経路
	寺本 憲功 九州大学医学部薬理学	平滑筋型 KATP のフローニングに関する研究
	市来 俊弘 九州大学医学部心血管研究施設	アンジオテンシン によるサイトカイン産生の分子機構とその臨床的意義に関する研究
平成11年度	野村 政壽 九州大学医学部第三内科	配偶子形成、性腺機能における TGF- $\beta$ /SMAD シグナリングの役割
	田中 真二 九州大学医学部第二外科	新しい癌血管新生因子アンジオピエチン・ファミリーのシグナル伝達抑制による癌遺伝子治療の開発
	星野 友昭 久留米大学医学部第一内科	アレルギー及び自己免疫疾患における IL-18(IG1F)の役割の分子免疫学的解析
	筒井 正人 産業医科大学第二内科	ラット頸動脈硬化における一酸化窒素(NO)産生障害に対する G1 蛋白遺伝子導入の効果の検討
平成12年度	伊藤 公一 久留米大学分子生命科学研究所	膵臓外分泌細胞におけるリアノジン受容体の局在とその生理機能
	田村 雅仁 産業医科大学第二内科	腎疾患の進展における細胞接着シグナリングの病態生理学的意義
	牟田 達史 九州大学大学院医学研究院分子細胞生化学分野	自然分野における単球、マクロファージによる微生物認識応答機構
	阿部 義人 九州大学大学院医学研究院臨床分子医学	赤血球膜蛋白質 band3 の構造解析



1. Cytochrome P4501A1 gene polymorphism and homozygous deletion of the glutathione S-transferase M1 gene in urothelial cancer patients

Carcinogenesis, 16: 655-657, 1995

Takahiko Katoh<sup>2</sup>, Hisato Inatomi<sup>1</sup>, Akira Nagaoka<sup>1</sup> and Atsuo Sugita<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Branch of Public Health, School of Medical Technology and <sup>1</sup> Department of Urology, <sup>2</sup>School of Medicine, University of Occupational and Environment Health, Kitakyushu

2. Osteoblasts are regulated by the cellular adhesion through ICAM-1 and VCAM-1

Journal of Bone and Mineral Research, 10: 1462-1469, 1995

Yoshiya Tanaka<sup>1</sup>, Isao Morimoto<sup>1</sup>, Yoichiro Nakano<sup>1</sup>, Yosuke Okada<sup>1</sup>, Seiichi Hirota<sup>2</sup>, Shintaro Nomura<sup>2</sup>, Toshitaka Nakamura<sup>3</sup>, and Sumiya Eto<sup>1</sup>

<sup>1</sup>The First Department of Internal Medicine, University of Occupational and Environmental Health, Japan, School of Medicine, Kitakyushu

<sup>2</sup>The Department of Pathology, Osaka University, School of Medicine, Suita

<sup>3</sup>The Department of Orthopedics, University of Occupational and Environmental Health, Japan, School of Medicine, Kitakyushu

3. Molecular bases for inherited human complement component C6 deficiency in two unrelated individuals

The Journal of Immunology, 156: 2309-2315, 1996

Hiroaki Nishizaka<sup>1</sup>, Takahiko Horiuchi<sup>1</sup>, Zeng-Bian Zhu<sup>2</sup>, Yasuo Fukumori<sup>3</sup>, Kohei Nagasawa<sup>1</sup>, Kenshi Hayashi<sup>4</sup>, Richard Krumdieck<sup>1</sup>, C. Glenn Cobbs<sup>5</sup>, Masanori Higuchi<sup>1</sup>, Shinichiro Ysunaka<sup>1</sup>, Yoshiyuki Niho<sup>6</sup>, and John E. Volanakis<sup>2</sup>

<sup>1</sup>First Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka

<sup>2</sup>Department of Medicine, University of Alabama at Birmingham, Birmingham

<sup>3</sup>Department of Research, Osaka Red cross Blood Center, Osaka

<sup>4</sup>Institute of Genetic Information, Kyushu University, Fukuoka

<sup>5</sup>Veterans Affairs Medical Center, Birmingham

4. Genetic bases of human complement C7 deficiency

The Journal of Immunology, 157: 4239-4243, 1996

Hiroaki Hishizaka<sup>1</sup>, Takahiko Horiuchi<sup>1</sup>, Zeng-bian Zhu<sup>2</sup>, Yaps Fukumori<sup>3</sup>, and John E. Volanakis<sup>2</sup>

<sup>1</sup>First Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka

<sup>2</sup>Division of clinical Immunology and Rheumatology, Department of Medicine, University of Alabama at Birmingham, Birmingham

<sup>3</sup>Department of Research, Osaka Red cross Blood Center, Osaka

5. The relationship between Aryl hydrocarbon hydroxylase and polymorphisms of the CYP1A1 gene

Japanese Journal of Cancer Research, 87: 18-24, 1996

Chikako Kiyohara, Tomio Hirohata and Satoru Inutsuka

Department of Public Health, School of Medicine, Kyushu University, Fukuoka

6. Expression of Fas and anti-Fas-mediated apoptosis in human hepatocellular carcinoma cell lines

Journal of Hepatology, 25: 454-464, 1996

Hirohisa Yano<sup>1</sup>, Kazunori Fukuda<sup>2</sup>, Makoto Haramaki<sup>1</sup>, Seiya Momosaki<sup>1</sup>, Sachiko Ogasawara<sup>1</sup>, Koichi Higaki<sup>1</sup>, and Masamichi Kojiro<sup>1</sup>

<sup>1</sup>The First Department of Pathology, Kurume University School of Medicine, Kurume

<sup>2</sup>Cancer Prevention Division, National Cancer Center Research Institute, Tokyo

7. 胃癌における腫瘍マーカーの臨床的意義

消化器癌, 6:105-109, 1996

馬場秀夫<sup>1</sup>、大城辰雄<sup>1</sup>、高橋郁雄<sup>2</sup>、楠本哲也<sup>2</sup>、掛地吉弘<sup>2</sup>、市吉裕二<sup>2</sup>、鴻江俊治<sup>1</sup>、前原喜彦<sup>2</sup>、友田博次<sup>1</sup>、杉町圭蔵<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Gastroenterologic Surgery, National Kyushu Cancer Center

国立病院九州がんセンター消化器外科

<sup>2</sup>Second Department of Surgery, Faculty of Medicine, Kyushu University

九州大学医学部第二外科学教室

8. NADPH-Diaphorase and cytosolic urea cycle enzymes in the rat spinal cord

The Journal of Comparative Neurology, 385: 616-626, 1997

Hiroyuki Nakamura

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka

9. Pathogenicity of glycoprotein C-deficient herpes simplex virus 1 strain TN-1 which encodes truncated glycoprotein C

Microbiology and Immunology, 41: 545-554, 1997

Hiroko Minagawa, Ying Liu, Tetsuhiko Yoshida, Yasufumi Hidaka, Yasushi Toh, and Ryoichi Mori

Department of Virology, faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka

10. C-myc activates RCC1 gene expression through E-box elements

Oncogene 14: 2301-2311, 1997

Makoto Tsuneoka, Fumie Nakano, Hideko Ohgusu, and Eisuke Mekada

Institute of Life Science, Kurume University, Fukuoka

11. Overexpression of the MTA1 gene in gastrointestinal carcinomas: correlation with invasion and metastasis

International Journal of Cancer, 74: 459-493, 1997

Yasushi Toh<sup>1</sup>, Eiji Oki<sup>2</sup>, Shinya Oda<sup>2</sup>, Eriko Tokunaga<sup>2</sup>, Shinji Ohno<sup>1</sup>, Yoshihiko Maehara<sup>1</sup>, Garth L. Nicoloson<sup>3</sup>, and Keizo Sugimachi<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>Department of Surgery, Faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka

<sup>2</sup>Cancer Center, Kyushu University Hospital, Fukuoka

<sup>3</sup>The Institute of Molecular Medicine, Irvine

12. Identification of two novel mutations (1449delA and Q682X) in the NF1 gene and analysis for nonsense mutations in patients with neurofibromatosis type 1

Human Mutation, suppl 1:S47-9, 1998

Takahiko Horiuchi, Nobuaki Hatta, Ichiro Watanabe, Yuzuru Kobayashi, Margaret R. Wallace, Yuji Shirakata, Hisashi Ohtsuka, and Shigeru Fujita

First Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka

13. 20-Hz flicker stimulus can isolate the cone function in rat retina

Ophthalmic Research, 30:368-373, 1998

Yoshinobu Goto, Tetsujiro Yasuda, Shozo Tobimatsu, Motohiro Kato

Departments of Clinical Neurophysiology, Neurological Institute, Faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka



14. Chemically defined neuron groups and their subpopulations in the glomerular layer of the rat main olfactory bulb. . Structural features of calbindin D28K-immunoreactive neurons  
The Journal of Comparative Neurology, 392: 179-198, 1998  
Kazunori Tida<sup>1</sup>, Katuko Kosaka<sup>1</sup>, Claus W. Heizmann<sup>2</sup>, Toshio Kosaka<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>Department of Anatomy and Neurobiology, Kyushu University Faculty of Medicine, Fukuoka, Japan  
<sup>2</sup>Department of Pediatrics, Division of Clinical Chemistry and biochemistry, University of Zurich, Switzerland
15. Mechanisms of vasorelaxation induced by troglitazone, a novel antidiabetic drug, in the porcine coronary artery  
Circulation, 98: 2446-2452, 1998  
Junya Kawasaki, Katuya Hirano, Junji Nishimura, Masatoshi Fujishima, Hideo Kanaide  
Research Institute of Angiocardiology and Second Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, Kyushu University, Fukuoka  
Division of Molecular Cardiology, Research Institute of Angiocardiology, Faculty of Medicine, Kyushu University Fukuoka
16. Regulation of Angiotensin Receptor Expression by Nitric Oxide in Rat Adrenal Gland.  
Hypertension, 32: 527-533, 1998  
Makoto Usui, Toshihiro Ichiki, Makoto Katoh, Kensuke Egashira, Akira Takeshita  
Research Institute of Angiocardiology and Cardiovascular Clinic, Kyushu University, of Medicen
17. Downregulation of Angiotensin Type 1 Receptor Gene Transcription by Nitric Oxide.  
Hypertension, 31(part2, suppl): 342-8, 1998  
Toshihiro Ichiki, Makoto Usui, Makoto Kato, Yuko Funakoshi, Kiyoko Ito, Kensuke Egashira, Akira Takeshita  
Research Institute of Angiocardiology and Cardiovascular Clinic, Kyushu University, of Medicen
18. Selective Transvasculr Delivery of Oligodeoxynucleotides ot Experimental Brain Tumors.  
Journal of Neurooncology, 43:143-151, 1999  
Hiromichi Koga, Takanori Inamura, Kiyonobu Ikezaki, Ken Samoto, Koichiro Matsukado, Masashi Fukui  
Department of Neurosurgery, Neurological Institute, Kyushu University Faculty of Medicine.
19. Studies of Bovine enterovirus Structure by Ultraviolet Resonance Raman Spectroscopy.  
Journal of Virological Methods, 77: 117-123, 1999  
Shoji Kaminaka<sup>1</sup>, Yohihiro Imamura<sup>1</sup>, Masahisa Shinfu<sup>1</sup>, Teizo Kitagawa<sup>2</sup>.  
<sup>1</sup> Dept. of Virology, Kurume University School of Medicine,  
<sup>2</sup> Institue for Molecular Sciende, Okazaki National Researchi Institutes
20. Deficiency of triad junction and contraction in mutant skeletal muscle lacking junctophilin type 1  
The Journal of Cell Biology, 154(5): 1059-1067, 2001  
Koichi Ito<sup>1</sup>, Shinji Komazaki<sup>2</sup>, Kazushige Sasamoto<sup>3</sup>, Morikatsu Yoshida<sup>1</sup>, Miyuki Nishi<sup>1</sup>, Kenji Kitamura<sup>4</sup>, Hiroshi Takeshima<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>Institute of Life Science, Kurume University and CREST, Japan Science and Technology Corporation, Fukuoka  
<sup>2</sup>Department of Anatomy, Saitama Medical School, Moroyama, Saitama  
<sup>3</sup>Section of Oral Neuroscience, Graduate School of Dental Sciences, Kyushu University, Fukuoka  
<sup>4</sup>Department of Pharmacology, Fukuoka Dental School, Fukuoka
21. A Novel IkappaB Protein IkappaB-zeta, Induced by Proinflammatory Stimuli, Negatively Regulates Nuclear Factor-kappaB in the Nuclei.  
Journal of Biological Chemistry, 276;29: 27657-27662, 2001  
Soh Yamazaki, Tatsushi Muta, Koichiro Takeshige  
Dept. of Molecular and Cellular Biochemistry, Graduate school of Medical Sciences, Kyushu University





昭和17年（1942）31歳

### 現代医学の科学性（四）

貝原守一

医学は現在多数の分科に分れては居るが、勿論此の分科は過去に於て一つの何か新しい医学のイデーが存在した時に起つたものだ。だから分科そのものには勿論意義があり、医学の進歩は各分科の進歩だといふ点に誤りはないが、此の場合分科の一つ一つが切りはなされては存在し得ない。現在の様に分科内での研究が進められるに伴ひ他の分科との隔たりが益々増大されるようでは、医学全般はおろか、個々の分科の発展も望まれない。同一の研究対象が各分科内で異なつた意味で、即ち各分科に特殊な方法によつて、深く追求されはじめた為に、互いに全く縁遠いものとなつたり相対立するようになっては到底駄目だ。

医学の起源が治療を対象とした一つの技術だつたことはいふまでもない。其後の歴史的親展に伴つて、すべての診療的経験を正しく科学的論理によつて体系づけ更により進歩した診療の技術を作るために、またこれ等の体系づけられたものを實際に應用して更に多くの経験を集積するために、論理的及び実地的医学が分化し、更に十九世紀以降の急激な医学の成長とともに、現在のような基礎及び臨床医学に

二大別される多数の分科を派生したことは当然だ。然し常に医学の目的は正しい科学的観点に立つた、人間本質の把握だし、人間の疾病の予防及び治療だといふ事が忘れられてはならない。

現代医学はその内部に数々の根本的な非科学性を含んで居るのに、今までこれ等の点は取り上げて論じられて居ない。これはこの国の医学に従事するものさへもが一般に科学的に低い水準であることによるものだ。現在まで自然科学としてのみ考えられて来た医学が、最近になつて著しく社会的に取り扱われねばならなくなりつつあるので、尚更医学者の批判の対象からはずれて来るのだから。然し医学ももっと活発に科学的批判の対象として選ばねばならない。医学の科学性は医学自身の内部に於ての批判によつて正しいものとなつてくるのだ。

九大新聞（昭和十二年八月二十七日）より